
開会挨拶

司会
王青

中華日本哲学会副会長

【王青】 まず中国側の代表として中華日本哲学会の会長でいらつしやいます卞崇道先生、日本側の代表として東京大学人文社会系研究科の教授でいらつしやいます竹内整一先生に開会のご挨拶をいただきます。

【卞崇道】 遠路はるばる日本からいらした研究者のみなさま、中国全土からお集まりくださった研究者の方々、おはようございます。

中日双方の約一年間の準備を経て、研究者のみなさまの多大なご支援、ご協力のもとで、このシンポジウムを期日通りに開催することができました。

死生の問題は、時間・空間を超えて、永遠に続く問題です。人間がいつになっても直面しなければならぬ問題であると同時に、思想家が必ず考え、そして答を与えなければならぬテーマでもあります。現在のグローバルゼーション、そしてローカリゼーションの波の衝撃、そしてハイテク化、情報化のもとで、ひとびと



下崇道氏

を深く研究して、さまざまなかたちで生命教育を繰り広げており、ひとつひとつの生命の内実を豊かにしております。

この会議は、中日両国の研究者による、生死をテーマとした初めてのシンポジウムになります。今回のシンポジウムをきっかけにして、そしてプラットフォームにして、今後死生という課題に関する研究が更に深まっていくなものと信じております。この会が終わった後でも、お互いに考えを深め、そして議論が続けられるように願っております。

生死観について申し上げますと、私自身、いよいよ死が近づいてきているというを感じております。私はいのちの続かきり、この会も含め、生死に関する中日双方の議論の基礎作りに尽力したいと思っています。最後になりましたが、この学術会議が素晴らしい成果をおさめることを祈念して、ご挨拶とさせていただきます。

の生存・生活様式、そして倫理観・価値観・人生観も、それらの影響を大きく受け、それに伴い生死に関する考え方も大きく変化し、研究の分野でも重要な課題となってきております。

中国において、儒教・仏教・道教を中心とする中華伝統思想は数千年にわたって中国人の生死に関する知恵を生み出し、東アジア地域の思想・文化に深く、そして重要な影響を与え続けてきました。現在、中国の研究者は、それらの思想のエッセンスを検討し、掘り下げ、それを受けつぎ発揚することで、現代の中国人の生活を豊かにしております。また、現在の中国のさまざまな問題と結びつけながら中国と他国の生死に対する考え



竹内整一氏

ます。ありがとうございます。

【竹内整一】 東京大学の竹内でございます。日本側を代表いたしまして簡単に開会のご挨拶を申し上げます。このたび日中国際研究会議「東アジアの死生学へ」がこうして開催できましたことは、ひとえに中国側の関係者、特に中華日本哲学会の卜崇道先生のご尽力によるものと深く感謝しております。

死生学という学問はまだまったく始まったばかりでありまして、対象も方法も手探り状態ではありますが、死と生の思索ということになりますと、どんな文化・伝統におきましても、それこそ最も深く、分厚い文化・伝統が積み重ねられてきたところでありまして、その意味では最も古い営みの一つと言ってもいいと思います。

主旨文にも書きましたが、「東アジアの死生学へ」というテーマは、西欧の死生学からこちらへ、という、安易な二者択一ではなくして、むしろわれわれが生きて、積み重ねてきたその最も基礎的な部分にあらためて目を向けて考えてみたいということでございます。

中国と日本の研究者がこうして共同研究をすることが、この問題に対して必ずや実り多い結果をもたらすであろうことを確信いたしましたして、二日間ではありますが、今われわれが問題にできることをできうるかぎり問題にしていければと思います。

あらためて今日の会議のために準備してくださったみなさまに感謝を申し上げて、開会の挨拶とさせていただきます。